

| | |
|------------------|---|
| Title | 「出島蘭館日誌」上巻(村上直次郎譯, 文明協會發行) |
| Sub Title | |
| Author | 松尾, 善郎(Matsuo, Yoshiro) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1938 |
| Jtitle | 史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.141- 143 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0141 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たてゝ後世その治を讃へて寛政の治と呼ばれるに至り、後の天保の治にあつては之が享保の治と共にその改革の目標とせられたこととも人のよく知るところであらう。而も公のかゝる數多の善政の中、今猶ほ吾人の感謝せざるべからざるものの一に七分金積立の制度がある。江戸市中の町入用を緊縮してその結果浮び上つた金額の七分づゝを積立て、之を不時の入用、窮民の賑恤その他の公益事業に當てんとしたものであるが、之が續いて明治時代にまで繼承せられ、當時東京の道路・橋梁・墓地瓦斯等の施設を始め數多の公共的事業は實に此の共有金によつてなされたものであり、更に東京市養育院の設立も亦この資金によつてなつたのである。

本書の著者は恰も當養育院の經營に當たられて居たと云ふ關係もあつて夙に公の盛徳を欽慕すること一方ならず、生前には樂翁公遺徳顯彰會々長の任にもあつた程であり、遂にその正確なる傳記の編纂を企てられるに至つたわけで、その動機としては、着手當時の世態が今日とは自ら異なつても居た爲か、昭和六年七八月の頃に書かれたと云ふ著者の自序によると、公明正大なる公の遺徳を以つて現時社會の弛廢せる人心を矯正せんとするの意圖を含む旨が説かれて居る。併し實はその未だ著者の全希望を満たすに及ばずして惜しくも遺稿となつてしまつたもので、その稿本が遺志によつて同會に贈遣せられることとなるや、漸く今日茲に本書の刊行を來ることが出来るやうになつたのである。未定稿とは云つても、決して不整備であるのではなく、いま次に目次によつてその内容の概観を示すならば、緒言の他全巻は十五章に別たれ、公の生誕より卒去に至るまで概して年を追ひつゝ、又いづれかと

云へば内より外ぐと云ふ記述の仕方で、生立と教養・松平家相續・白河藩治・執政輔佐・施政の方針・財政・財政整理・風紀の肅正・學政・尊王・外交・退職・白河藩治(再び)・文藝・卒去等の各章を含み、之に附録として詳細なる系譜と年譜とが加はつて居る。その上本文の他二十二葉の圖版にも亦重要にして興味深きもの多く、當時のアメリカ、ロシア、蝦夷等の地圖類や中には公自筆のアルファベットの如きも見られ資料の豊富にして適確なることは、恐らく公に關する從來の著作の遠く及ばざるところであらう。なほ本書の編纂に、三上參次、平泉澄、中村孝也諸博士の關與せることからみて公に關してその人となり、學殖並びに治績などの簡要なる知識を得るために本書は最適の書といふべく、且つ各章末に参考書名の擧げられて居るのも研究者にとつては誠に親切と云ふべきである。(菊判本文四三〇頁、附錄六六頁、圖版二二葉)

(會田倉吉)

「出島蘭館日誌」上巻

(村上直次郎譯
文明協會發行)

前に「バタビヤ城日誌」を譯出せられた村上直次郎博士は今回順序として、先づ本書の底本に就いて少々述べよう。原書は

Daghregister des Comptoirs Nangasacque と稱し、一六四年六月二十一日(寛永十八年五月十七日)以後歴代の長崎出島に於ける和蘭商館長の手になつた日記である。が、村上氏の今回譯出せられるのは其巻頭の十年間であり、更に刊行せられたのは

其内でも最初に當たる二年餘の分である。之が本書の本文を構成するのであるが詳しく述べる。

本書は本文が三七〇頁、序説が八十二頁よりなつてゐる。序説は和蘭建國より始めて平戸時代に於ける日蘭貿易に關して述べ、

更に蘭人の長崎移轉から寛永二十年六月に至る迄の史實を解説して居られる。其詳細な紹介は此處には省くが、非常に詳細親切を極めたものである。其片影を窺ふ爲に次に其目次を掲げる事とする。

一、オランダ聯合東印度會社の創立

二、平戸のオランダ商館

三、タイオワンのオランダ商館

四、ポルトガル貿易と基督教

五、平戸商館の破壊

以上がオランダ建國より平戸貿易の終末迄の解説で以下六、七兩節が本文の解題となる。

六、オランダ商館の長崎移轉

七、移轉當初のオランダ貿易

さて本文に關しては、先づ順序として、その目次を次に掲げる事としよう、本文は左記三人の日記より構成せられ、其年限は前述の通り約二年餘である。

一、マキシミリヤン・ルメールの日記

(一六四一、六、二五(寛永十八年五月十七日))

二、ヤン・ファンエルセラックの日記

最後に後の續刊される事、一六五〇年代以後の分の翻譯を手掛

(一六四一、一一、一(寛永十八年九月二十八日))
(一六四二、一〇、二八(寛永十九年閏九月五日))
三、ピートル・アントニスゾーン・オーフェルトワーテルの日記
(一六四三、一〇、二九(寛永十九年閏九月六日))

此時代及び此以後の基督教並びに貿易關係は、前代の安土或は桃山時代のそれに於けるが如き派手な色彩は全く見られず、唯既得權を如何にして持續して行かむかとして必死になつて居る處に、別の興味が見出されるといふのは、幸田成友先生のいはれた言葉であるが、私としてもそれは事實であると思ふ。

本文は原書の精密なる記述に相俟つて、博士の懇切なる譯註により、此方面の研究に一方ならぬ便宜を與へられる事は心から感謝してやまぬ處である。

然し愚考を以てすれば、商品の數量を示す單位が、蘭文には如何なる場文にも stucx 一點張りで誌してある事に對し、之は本書の翻譯の難關である事は充分に認めるが、博士は商品の不明の場合も推定に依つて多分如何なる種類に屬するであらうといふ見解の下に、或は箇、或は枚、或は本、或は反巻疋等に當てゝ居られるが、之は品物が不明である以上、單位も矢張 stucx として、割註或は索引に恐らく何の種類で單位は何とした方がよいとか、された方がより御親切ではなかつたかと思はれるのである。私如きものがかかる事を申すのは如何であるかと思ふが、品物の種類を發見したりする上に必要ではないかと思つて、斯く生意氣な言を博士に申上げる次第である。

る人の出で事を擇えども其の事を申し添へて此書評を終る事とする。(松尾善郎)

Digging up the Past (The Romance
of Archaeology with 32 pages of
illustrations) by Sir Leonard
Woolley. London, 1937.

普及版 Pelican Books の中に出された本書は、ウルの發掘に
よつて有名な Woolley 出がラヂオ放送の講演を骨子として清新
な寫眞を加へ、發掘考古學 (Field Archaeology) の入門として
提供されたる、百餘頁の小冊子であるが、頗る内容豊富にして、
學的態度を以て一貫された好著である。いま簡単にその内容を紹
介するならば、

第一章は緒論として發掘考古學の目的を論じ、單なる古物の發
見にあらずして發掘物に近代性を見出すことが我々の興味を喚起
する所以なることを説き、發掘物の史的關聯を明らかにするをそ
の目的となすと述べ、次いで『何故發掘を行ふか』、即ち目的物を
發掘せねばならぬ理由について、遺跡の地中に埋没せる理由、そ
の地點を如何にして知るかにつき、著者の経験による實例を擧げ
て説明する。

第二章『發掘の開始』に於ては、遠征隊の準備につき必要な
スタッフの問題、確實なる記録の必要、大規模の發掘作業に於け

る人員の配分と統制、發掘品に對する盜難の豫防、隊員への獎勵、
學者自身の作業などの實際問題を興味深く説明し、さて如何なる
地點より實際の發掘を行ふべきかにつき、トレンチングの開始、
年代順に作業を集中すべきこと、城壁をたどる方法、土器の形式
を以て年代測定の基準となす場合多きことなどを述べる。

第三章『都市の遺跡に於ける作業』として、先づ着手する建築
物の性質と年代の決定をなすべきこと、その具體的方法につきて
説き、次いで建築物のプランの確定を要すること、その發見の實
際上の苦心につきテル・エル・アマルナの神殿とウルに於ける私
人の住居の發掘の實例を語り、それより得たる事實が當時の生活
の上に多大の光明を投じ、また更に重大な史實を知らしめること
を述べ、發掘の結果と記錄による史實との照應、記錄の缺けたる
場合に於ける比較的方法による聯關の推定と發見を論じ、エジプ
ト出土の印章がメソポタミヤ起原なることを推定するに至つた興
味ある實例を擧げ、最後に考古學によつて史的關聯は明らかにな
し得るとも記錄無き時代の年代確定は不可能なることなどを論ず
る。

第四章『墳墓の發掘』に於ては、我々が實際に最も多くの遺物
を得るのは墳墓よりであること、副葬品の性質と意義を述べ、盜
掘が廣範圍に及ぶる事實、發掘の事實上の困難、發掘物をその原
位置を動かさずして觀察すべきこと、精密なる作業の方法、忍耐
深き労力を以てする發掘物の復原の實例として、蠟、石膏の使用に
よる家具の復原、骨骼の保存、土版の復原などを詳細に説明する。

第五章『考古學的資料の利用』に於ては、現地より得たる資料